

# 共同体意識支えた青銅器祭祀

富岡正美

荒神谷遺跡の謎ブックレット⑧

荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡  
—大量の青銅器出土の謎—

一九九七年八月

発行 島根県斐川町

# 一席

## 共同体意識支えた青銅器祭祀

滋賀県大津市

富岡

まさよし  
正美

### 一、はじめに

「古代出雲に大勢力?」 「出雲王国裏付け」など  
の見出しで湧いた加茂岩倉遺跡のニュースは確かに  
衝撃的であった。常識を覆す大量の銅鐸が神庭荒劍  
谷遺跡のすぐ近くに一括埋納されていたという驚き  
であったが、それ以上に弥生時代の出雲文化のすご  
さに一層夢ふくらむ思いがした。

加茂岩倉遺跡の出土銅鐸については継続中の調査  
を待たねばならないが、大きな関心事はなぜ銅剣・  
銅矛と銅鐸が共存してしかも大量に埋納されたかの  
謎である。これらの青銅器が製作（入手）・使用さ  
れたのは、弥生時代中期を中心とした時期と推定さ

れるので、その年代に焦点を当てて考察する。

『古事記』『日本書紀』は神話の約三分の一が出  
雲を舞台にした話であるが、地元で書かれた『出雲  
國風土記』の神話とは内容が大きく異なっている。  
いざれも六、七百年を経た後の八世紀初めに書かれ  
た史料であるため、何らかの史実に基づく神話・伝  
承としても、そのままの内容をもって弥生時代の復  
元に安易に結びつけるわけにはいかない。やはり考  
古学の情報をもとに読み解いていくのが本筋と考え  
るので、史料としては当時の中国史書を参考に弥生  
の出雲社会の実態に迫ってみたい。

## 二、「聞く銅鐸」までで終わった出雲

加茂岩倉遺跡から出土した三十九個の銅鐸は、これまでの調査によると外縁付鉦1式（II-1）、外縁付鉦2式（II-2）および扁平鉦式新段階（III-2）の三種で、時期はいずれも弥生中期のものである。（実年代では前一世紀～後一世紀前半頃と推定）

神庭荒神谷遺跡から出土した五個の銅鐸は、五号銅鐸が最古段階の菱環鉦1式である以外はいずれも外縁付鉦1式と報告されている。時期は弥生前期末～弥生中期前半とみられる。

両遺跡の出土品はいずれもいわゆる「聞く銅鐸」で、新しい段階の「見る銅鐸」は含まれていない。時期はほぼ重なるが、神庭荒神谷には最古段階を含んでおり、加茂岩倉遺跡には新しい扁平鉦式を含むので若干の時期差はみられる。

また両遺跡の埋納状況について比較すると、

①袋になった谷奥の隠れた丘陵斜面に埋納

## ②いすれもいわゆる「聞く銅鐸」の型式

③×印の刻線（荒神谷は銅劍に×印）、朱の痕跡などの共通点がみられる。

一方、それぞれの特異点としては、

①神庭荒神谷は銅鐸六個と銅矛一六本と一緒に埋納

②加茂岩倉の銅鐸はほとんどが大小の「入れ子」などが挙げられる。

表1は、全国の銅鐸出土数を主な地域（国）別、型式別に比較した表である。最多の出雲は「聞く銅鐸」だけ銅鐸の時代は終わり、「見る銅鐸」は全く出土していないのが特徴といえる。近江や東海地域では後の「見る銅鐸」の比率が高い。

## 三、「聞く銅鐸」のマツリの姿

銅鐸は何に使われたのか、今ではマツリの道具、

表1 全国の銅鐸出土数

国別	出土総数	銅鐸			
		I 菱環鉦式	II 外縁付鉦式	III 扁平鉦式	IV 突縁鉦式
出雲	50	1	37	10	48
津	34		12	14	26
路内	15	1	5	2	8
淡河	18		1	11	12
大紀	19		7	6	13
讃岐	38		3	13	16
河内	20		4	7	11
河東	41		3	22	25
河西	36		3	2	5
河西	28		1	1	2
河東	29		1		1
その他	135	2	32	38	72
					43

\*国別で出土数の多い地域（≥15）のみを示した。うち型式の判明分を I～IV式に分類。

\* I～III式およびIV-1式：「聞く銅鐸」、IV-2～IV-5：「見る銅鐸」

[佐古・枝氏作成の分布図よりまとめた]

紹介されている。オドロオドロしい人物像だが、首から鏡を吊り下げ、手には各種の鉛を持つ。いくつもの朝鮮式小銅鐸を腰に下げ、銅劍を帯びている。

動き回るとさぞ大きな音が出ただろう。青銅器が日本列島に盛んに輸入された弥生前期には、銅劍・銅鑼などが朝鮮半島でも儀器として使われていた。

神庭荒神谷の「聞く銅鐸」も手ずれや内面突帯の摩滅から実際に鳴らして使われていたようだ。

さて弥生後期（一世紀後半～三世紀前半）に入る、青銅器祭器は一齊に大型化していく。銅鐸は裝飾性に富んだ「見る銅鐸」となり、武器形は幅の広い見るための平形銅劍や広形銅矛となって武器としての実用性を失う。

その分布も弥生中期後半までは、銅鐸と武器形青銅器はともに各地に広がるが、弥生後期になると東（近畿・東海）の銅鐸、西（九州・四国）の広形銅矛といわれるようになります。二つの地域に分かれて対

峙する。しかし出雲は大型化した段階の青銅器祭器は全く使っていない。なぜだろうか。

寺沢薫氏は、「聞く銅鐸」は歎靈を守りつなぎとめる間接的な祭器だが、「見る銅鐸」は直接的に集落そのものを邪氣から守護する神に化身したと考える。田中源氏は「聞く」が「見る」に変わることがマツリからマツリゴトへの変化を示すという。出雲の人々は、次第に権力者の神器と化していく近畿や九州の祭器を受容しなくなかったのだろう。

#### 四、「百余国」はどこを指すか

出雲での青銅器理納の背景を考えるために、弥生中期前後の朝鮮半島情勢に目を向けてみよう。

漢の武帝は積極的な対外政策によって紀元前一〇八年、当時朝鮮半島の北部に栄えた衛氏朝鮮を滅ぼし、新たに楽浪郡など四郡を設置した。漢の直接支配となつた朝鮮半島内では南部へ移住する人々が増

中心に地域集團としてまとまりを見せる段階のクニである。西部出雲もその一つであつただろう。

#### 五、出雲平野に開けた弥生のクニ

中国の「後漢書」には、紀元五七年に倭の奴國王が後漢に朝貢し、金印を下賜されるとの記事がみえる。一世紀半ばには北部九州に王国が存在していたのだ。事実奴國の中心とみられる福岡県須玖岡本遺跡では、多数の前漢鏡と青銅武器を副葬した王墓が見つかっており、そこには祭政両面を掌握した支配者像がうかがえる。ちょうどこの頃出雲では青銅器祭祀が終焉を迎え、一世紀後半頃には大量埋納が行なわれたと推定する。

弥生中期の北部九州は、朝鮮半島を通じて中国の先進文化を積極的に取り入れ、早くから政治社会を形成しつつあった。出雲はどうか。遺跡の面からそれを検証してみよう。

「百余国」は北部九州を先端とする西日本各地のクニを指すとみられる。それは共同体（ムラ）の首長共通の文化圈を形成していたと考えられることから、近畿以西の西日本一帯に広く分布した。西日本は「百余国」は北部九州を先端とする西日本各地のクニを指すとみられる。それは共同体（ムラ）の首長が祭祀をつかさどり、いくつかのムラが核のムラを

斐伊川（出雲大川）の下流域で弥生前～中期に營まれた大きな集落としては、原山遺跡と矢野遺跡が挙げられる。原山遺跡では朝鮮系無文土器の出土が注目される。矢野遺跡とその周辺は出雲平野の中央部一帯に広がる大規模な集落遺跡で、神庭荒神谷にかかる人々の拠点集落とみられている。

開発が進んだ出雲平野の農耕社会は、弥生中期には繁榮期を迎える。地域の各共同体をまとめて統率する首長も出現していた。そして北部九州とは頻繁に交流し、朝鮮半島との直接交易も行ないながら独自の選択で青銅器祭器を受け容れていた。

#### 六、独自の祭儀創出に向けての埋納

青銅器はなぜ埋納されたかに話をもどそう。

先ず両遺跡の埋納場所を考察すると、神庭荒神谷は当時の宍道湖に面した谷奥で、佐経山を仰ぐ位置にあり、その埋納を担ったのは出雲平野に拠点集落

うになる。こうした変革の流れの中で新しい社会の秩序を守るために、集団の人々は長年ムラで使ってきた祭器を持ち寄り、聖地の谷奥に一括して丁寧に埋納し、大地の神靈に永遠の守護を託したのだ。配布のために出雲で製作した銅劍には使わずして埋納されるものもあった。

金子裕之氏は、「封」を意味する記号で、土器や輪輪にも例を見るように神靈を封じ込める、あるいは惡靈を防ぐ意味で使われるという（『まじないの世界』I 至文堂）。×印は埋納に際して刻印されたものであろう。

#### 七、倭人伝の投馬国は出雲

三世紀に書かれた「魏志」倭人伝から出雲にかかる状況を探ってみたい。

倭人伝の國別記事には、伊都國の次に奴國、不弐國があり、さらに「南して投馬国に至るは水行二十

をもつ集團とみる。また加茂岩倉は斐伊川支流の赤川流域にある加茂盆地を拠点とした集團と考える。加茂は木次から横田を経れば吉備や播磨に通するルート上有る。埋納状況から両者は共通の信仰をもつ集團とみられ、両遺跡の中間にそびえる大黒山こそが神の山として崇められたのではないか。

出雲平野の集團は北部九州の銅矛を持ち込み、銅劍の技術を導入して出雲で鋤造した。加茂盆地の集團は、近畿やその周辺地域との交流で得られた銅鐸の製品と技術をもとに出雲でも銅鐸を製作した。

この段階の銅鐸と武器形祭器は、いずれも豊穣を祈る同じ神マツリの祭器であった。進取性に富む出

雲人は新しい文化を拒まず受け容れ、自らの文化を育てた。地域共同体の人々は強い宗教心で結ばれ、シャーマンを中心の社会を形成していくのだろう。

弥生社会の階層化が進み各集團が再編成される過程では、地域を統治する首長が祭祀権も体現するよ

日。……南して邪馬台国、女王の都する所に至るには、水行十日・陸行一月」と記される。私はこの投馬国（ツマ・トマと読む説もある）は出雲と考える。

投馬国との比定地にはいくつかの説があるが、笠井新也氏が一九二三年に国名の音韻上の類似などを理由に出雲説を発表し、その後も出雲説を唱える人は多い。山尾幸久氏もその一人だが、山尾氏は邪馬台國大和説をとる中で、問題となる倭人伝の行程記事

を伊都国起点の放射式で読み取り、また方位の「南して」を單なる「東」の誤記とするのではなく、十五世紀初めに李氏朝鮮で作られた地図「混一疆理歷代國都之圖」の日本列島が東を南に向けて描かれていることをもとに、中国人のこの方位認識は唐もしくは晉の時代まで遡る可能性があると論じている。東を南と誤解したとすれば、伊都国から水行二十日の投馬国は、福岡県糸島地方から東へ海路二十日の日本海沿岸地となり、出雲がそれにふさわしい。

山尾氏の説は考古資料を吟味し史料を検証した客観的な見解であり、私ものと考えを支持する。

邪馬台國論が命題ではないで深追いは避けたいが、投馬国は伊都国におされた「大率」の検察下にあったので、北部九州の諸国とも交流は多かったとみる。また投馬国は五万余戸とあり、戸数はかなり多いので、三世紀の投馬国は、後述する四隅突出型墳丘墓の分布などからみて出雲から因幡あたりまでの広域の首長連合を指すかと思われる。そして青銅器を埋納した一世紀頃の西部出雲は、原投馬国ともいうべき地域集團であったと考えられる。

#### 八、その後の出雲大國檢証

青銅器が埋納された後の西部出雲はどんな政治社会であつたか。一世紀頃は不透明な部分も多いが、一世紀末か三世紀初頭になると、突然斐伊川下流域の西谷丘陵に大型の四隅突出型墳丘墓が出現する。

#### 前方後方墳の松本一號墳などを造営していく。

#### 九、おわりに

弥生時代の出雲には、九州や大和と抗争をしたとか配下に入ったという状況は認められない。むしろ平和的で友好的な地域連合体という感じさえ浮かんでくる。日本海に面して外に目を向ける進取的な風土を持ち、新しい文化を受容して独自の祭儀を創出していく出雲のしたたかな個性がうかがわれる。

出雲の人々には、その基層に農耕のマツリ、海の

マツリに根ざした強い宗教的結合があり、青銅器の埋納には二世紀からみられる政治的なマツリへの変革に対処した人々の葛藤が顯れているように思う。

古墳時代になると出雲は畿内の傘下に入るが、出生雲の「宗教大国」の姿は、今も神話の中に生き続いている。その出雲の原郷こそが神庭荒神谷や加茂岩倉の地にあったと考える。

その西谷三号墓には吉備の特殊器台・特殊壺が供獻されていた。時期を同じくして吉備では植築墳丘墓が造営される。これらはまさに出雲・吉備それぞれに成立した階層秩序をもつ地域集團の大首長クラスの墳丘墓と推定される。

共同体のマツリであった青銅器祭祀が消滅し、やがてそれに代わって出現したのが四隅突出型墳丘墓による大首長葬送の祭祀であった。

西谷三号墓が造営された直前の一世紀後半は「後漢書」倭伝にいう「桓靈の間、倭国大いに乱れ」の時代である。倭国の乱は西日本各地域の政治的統合が進む過程で起きた各地の争乱と考える。政治的緊張が高まる中で、出雲は吉備と政治的な同族関係を結びその安定を図ったのである。

斐伊川中流域で加茂岩倉遺跡にかかるわった地域集團は、後に畿内勢力とつながり、四世紀には神原神社古墳（「最初三年」銘の三角縁神獸鏡を出土）や

#### 【主な参考文献】

山尾幸久「新版・魏志倭人伝」講談社 一九八六

渡辺貞幸「古代出雲の栄光と挫折」「王權の争奪」

門脇慎一「検証 古代の出雲」学習研究社 一九八六

集英社 一九八七

近藤喬一「青銅器と鉄器」「朝日百科 日本の歴史

39」「一九八七

寺沢 薫「弥生時代の青銅器とそのマツリ」「考古学 その見方と解釈 上」「一九九一

田中 琢「日本の歴史2 倭人争乱」集英社 一九九一

九一

春成秀爾「神庭（荒神谷）青銅器と出雲勢力」「荒神谷遺跡と青銅器」一九九五

田中義昭「荒神谷遺跡と青銅器の世紀」「日本の古代遺跡を掘る3 荒神谷遺跡」一九九五

△選評

課題テーマを真正面からうけとめ、論旨をわめて明快な秀作」と感服させられた。

この秀作を生んだ理由を考えてみた。(A)史料・先行学説の扱い方。(1)考古資料と文献史料それぞれの性格を正確におさえて、自説の証明根拠に用いている。(2)内容をよく消化して選択した先行学説が、きわめて調和よく配置されている。(B)論理の組み立て方。(1)出雲地域に視座を据えて、朝鮮半島・中国にわたるアジア史的視点のもとに、時代の特長の把握が適確である。(2)その中で、テンボよく展開される自説の主張・邪馬台國論への同説も含めて一が、同時に自説の妥当性も意識されているのは、とくに留意させられた。

尤も、荒神谷・加茂岩倉両遺跡を含めた諸集落の「再編成」の行方が投馬国の構築とどうかかわるのか、創出された「独自の祭儀」の内容、出雲→因幡の「地域連合体」などについてはもう少し説明が欲しかった。しかし、

それとて、本論文を首席に押す妨げとなるものではなくない、というのが審査員全員の一致した判断である。

(丹波義一)